

「第三の場」としての図書館

久 野 和 子

The Library as the “Third Place”

Kazuko KUNO

1. 「場としての図書館」(the library as place) の研究背景

F.W.ランカスターの「ペーパーレス社会」が到来しつつあるかのように、世界的規模で様々な情報のデジタル化、ネットワーク化が1990年代後半から急速に進展し始め、図書館は、その本質的機能と役割について厳しい見直しと検討が迫られた。特にアメリカ図書館界では「access vs. holdings」(アクセスか、所蔵か)という議論、もしくは図書館のトポロジーとしての「インターネット」対「建物」という議論が盛んに行われるようになった。そうした状況の中で、デジタルライブラリに対抗する理論武装の枠組みとして、「場としての図書館」(the library as place)という考え方が注目されるようになったのである。

やがて「access vs. holdings」の論争は収束していったが、「場としての図書館」はアメリカ図書館界の大きなトピックでありつづけた。それは、アメリカで1990年代後半から、大学図書館や公共図書館の増改築や新築などが相次いだからである。現実問題として、館内のデジタルサービスを含めて、図書館という物理的な場への利用者の満足度を高めることが実際に求められたのである。図書館は、インターネット利用環境の整備・拡充、閲覧室や学習室の拡充・改善、身体障害者への配慮など、物理的環境としての場の改善により大きな力を注ぐようになり、従来の薄暗く堅苦しいイメージの図書館の空間を、明るく使いやすく居心地のよいスペースに変えていった。さらに、人的サービスを積極的に提供したり、ラウンジやホール、多目的スペース、共同学習室、飲食コーナー、コーヒーショップなどを新設したり、新しい情報環境と利用者のニーズに合わせて、「場としての図書館」を充実させる研究や努力が積極的になされてきた。

現在は日本においても「場としての図書館」についての重要性と意義が、様々な観点から論じられ、その議論や研究が進められるようになってきている。特に、大学図書館では、図書館に來なくても文献検索と情報収集ができるようなデジタルライブラリの構築を目指す一方で、「ラーニング・コモンズ」、「インフォメーション・コモンズ」などと言われる安全で快適な学習・教育の場、研究交流の場、情報アクセスの場を提供する試みが盛んに行われる状況が見られている。

2. 「場としての図書館」(the library as place) の研究意義および研究動向

アメリカ図書館情報学界の重鎮であるウェイン・ウィーガンンドは、これまで図書館情報学が「場としての図書館」(the library as place)という研究テーマを看過してきたのは大きな損

失であったと指摘した¹⁾。これまで図書館情報学の中心的な研究課題は「情報」、「教育」、「学習」であり、したがって、主に「図書館での生活の中での利用者」(the user in the life of the library)に焦点をあてた専門的で狭い考察が行われてきた。しかし、「場としての図書館」を研究課題とするということは、「利用者の生活の中における図書館」(the library in the life of the user)という広い観点から研究を行うこととなり、それは社会やコミュニティにおける図書館のより広い公共的な価値と役割とを啓蒙的に理解することにつながると思われた。

川崎²⁾は、アメリカにおける場としての図書館研究・図書館史研究の動向を概括し、特にユルゲン・ハーバーマス、ロバート・パットナム、レイ・オールデンバーグの研究が、これから「図書館という場の歴史と現状を把握するのに際して、豊かな洞察を与えてくれる」と指摘している。そして、「場としての図書館」についての研究は、利用者や「住民の生活の中で果たしてきた図書館の実態」、そして利用者や「住民の生活の中で果たすべき図書館のあり方を解明する」上で豊かな成果を生むであろうと示唆している。

さて、「場としての図書館」についての研究は、多様な視点、方法、解釈においてなされている。それらを、多分に重なり補完しあうことは承知しつつも、おおまかに2つの流れに分けて捉えてみたい。まず1つの流れは、ローケーションや建築デザイン、レイアウト、スペース、備品、蔵書などに着目し、そこから図書館という物理的な場がもたらす機能や役割をとらえようとする研究である。機能主義的、実証主義的な図書館建築論、図書館建築史などもこれに当たる。根本³⁾は、“place”を「場」ではなく、物理的な意味合いを持つ「場所」として訳すべきだと主張し、ウィリアム・バーゾール⁴⁾の言う「電子図書館」と「場所としての図書館」という2つの対立軸を紹介し、建物をともなった図書館研究の必要性を説いている。アメリカの図書館情報資源振興財団(CLIR)は2005年に『場所としての図書館：役割を再考し、空間を再考する』⁵⁾というタイトルの報告書を発表し、学習スペースの再配置、多様な交流の場の提供、思いがけない発見の機会の提供、安全性・快適性・静寂の提供などの図書館機能を論じている。また、「場としての図書館」に関する14の論文を掲載した『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』⁶⁾が2006年にアメリカで出版され、アビゲイル・ヴァンスリックの19世紀における図書館の物理的形態と読書との関係についての論考⁷⁾、カレン・アンテル他による、研究者の生活における物理的な場としての大学図書館の価値についての指摘⁸⁾など、現場や現物そして生の声に即した実証的な諸論文を読むことができる。

もう1つの研究の流れは、物理的な場を基盤としてもつ図書館に対して、現在、地域社会や利用者が求め必要としている政治・社会・文化的機能や役割に注目し、図書館の社会的な「場」つまり図書館の公共スペースと地元コミュニティとの関係に焦点をあてて再検討しようとするものである。最初の流れが、身体的な個人と物理的な場としての図書館との関係を主に扱うのに対して、こちらは、その解釈や視点の枠組みを概念的にもっと広げて、個人を含むコミュニティと公共スペースを含む場としての図書館との関係を中心に扱おうとする。

機能・役割的概念としての「場」と「公共スペース」については非常に多種多様な研究者による定義があるが、図書館情報学研究においてもっとも多く言及されている概念は、ハーバーマスの「公共圏」(public sphere)、オールデンバーグの「第三の場」(the third place)、パッ

トナムの「社会関係資本」(social capital)、そして「パブリック・フォーラム」(public forum)であろう。上述の『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』には、スペースと場に関する学術的ディスコースについての図書館学的見地からのレビュー⁹⁾の他に、これらの概念を扱った一連の実証的な研究論文が掲載¹⁰⁾されている。

本論考においては、オールデンバーグの「第三の場」という概念とそれを研究の枠組みとしている主なアメリカ図書館情報学研究文献をレビューすることとしたい。また、「社会関係資本」は、前の二者との関連において、また、「コミュニティ」構築の場、「出会いの場」という観点において、「場としての図書館」の重要なテーマの基盤をなしているため、「第三の場」との関連において言及することとなる。

3. オールデンバーグの「第三の場」について

(1) 都市研究

アメリカの社会学者レイ・オールデンバーグの提唱する¹¹⁾「第三の場」は、アメリカの郊外再開発都市を批判し、伝統的コミュニティ再興を説くジェイン・ジェイコブズ¹²⁾やロバート・グラッツ¹³⁾、ビクター・グルーエン¹⁴⁾を始めとするアメリカ都市研究の流れを汲むものである。特にジェイコブズは、アメリカの作家・ジャーナリストであり、長く忘れ去られていた「社会関係資本」という言葉を戦後復活させた研究者の一人である。彼女は、住民同士のつながりのある伝統的コミュニティを内包する「近代大都市の近隣関係を賞賛する」¹⁵⁾ためにその言葉を使ったのである。

ジェイコブズは、現在、都市研究の古典となっているその著『アメリカ大都市の死と生』¹⁶⁾(1961)の中で、モータリゼーションに基づいた画一的な都市開発による郊外の人気のない新興住宅地を痛烈に批判した。それに対して、大都市の中のスラム街と言われるような人口密度が高い下層階級の住む地域でありながら、安全性と秩序と活気とを保っている地域(たとえば1959年のボストンのノースエンド地区)を称賛し、その魅力と成功の源を実際の人々の生活を観察することによって、具体的に描き出した。つまり、魅力ある大都市の町の安全と秩序と活気とを作り出しているのは、日常生活における人びとの「歩道」の安全性に対する「信頼」、「歩道」を基点とした様々な社会的つきあいや「接触」、それによる「子どもの同化作用」(子どもの自由で安全な遊び場、公共的な学びの場としての歩道の効用)、そして多様性(住居、商店、製造業、文化娯楽施設、新旧大小の建物などが小規模の中に混在していることなど)であることを指摘したのである。したがって、最近の都市計画においては、外見やデザイン(画一的な住宅、公園やショッピングセンターなどの設置)などが重視される傾向にあるが、実際の日常生活において都市がいかに活用され、いかなる機能をもつか、そして人々の社会的習性に焦点を置いて町作りがなされるべきだと説き、住民同士のつながりのあるコミュニティが衰退しつつある現代アメリカ社会に警鐘を鳴らしたのである。

(2) 「第三の場」の定義

オールデンバーグは、ジェイコブズが注目した「歩道」の他に、コミュニティの安全と秩序

と活気の創出に貢献している住民の日常生活における「たまり場、お気に入りの場所」(hangouts) がどこに、どのように形成されているのかを実際に観察し、考察を行った。そして、その著『偉大な良き場：カフェ、コーヒーショップ、書店、バー、美容院、それにコミュニティの中心となるたまり場』¹⁷⁾で、「第三の場」がいかに都市生活者の活気と潤いある日常生活やコミュニティの安全・秩序を支え、個人的利益と社会的効用をもたらしているかを説いたのである。都市生活者には「第一の場」である家庭と「第二の場」である職場の他に、「たまり場、お気に入りの場所」つまり「第三の場」が必要であることを指摘し、街角から「第三の場」が消失するということは、住民の健全な日常生活や地域のコミュニティそのものが衰退することになると説いたのである。

オールデンバーグは「第三の場」は「堅苦しくない公共的な集まりの場」(informal public gathering places) であり、住民がいつでも誰でも自由に出入りでき、おもしろく陽気に会話を楽しめる場所であると定義した。その例として、ドイツのビアガーデン、イギリスのパブ、フランスやウィーンのカフェ、アメリカの開拓時代の居酒屋、床屋、美容院などをあげている。オールデンバーグによると、そうした「第三の場」は、人々のストレスや孤独を癒す「安息の場所」(haven) や「避難所」(shelter) であるばかりでなく、比類なき独自の価値と存在意義をもっていると述べる。つまり、「第三の場」は、他のどこの場所とも違う特徴を有しており、社会やコミュニティや個人に大きな利益と効用をもたらすのである。まず、彼の言葉を引用しながら、その8つの特徴を端的にまとめたものがあるので、以下に引用する¹⁸⁾。

□「第三の場」の8つの特徴

- ①「個人が思いのまま出入りでき、誰ももてなし役を要求されず、全員がくつろぎ、心地よく感じる」中立地帯にある(オールデンバーグ *Great Good*, 22)。
- ②「一般住民がアクセス可能で、形式張った会員資格や排除の基準を設定しない」平等主義にして包み込む場である。したがって、それほど身近でも親密でもない他者と交流し合える社会的ネットワークの拡大を促進する(24)。
- ③ 会話を主要な活動とする。オールデンバーグが説明するように、「第三の場を最も明示する特徴は、話が楽しいとか、活気があり、生気に満ち、華やかで魅力的ということである」(26)。さらに「他のどこよりも活気があり、束縛がゆるやかで、より熱心に追求される場である」(29)。
- ④ アクセスしやすく、協調的である。最良の第三の場とは、ほとんどいつでも1人で行けるし、知り合いが見つかる確信できる場をいう(32)。
- ⑤ 「常連」や「客仲間」を持つ。そして、「常連」や「客仲間」として、人を引きつけるのは、「座席数、提供される飲み物の種類、駐車場の有無、値段など」ではなく、新参者と信頼を育くみながら、「その場でくつろぎ、陽気な雰囲気をつくる」ことである(33-5)。
- ⑥ 建物は目立たない。「概して簡素で」、印象に残らない外観をしている。そうした建物は「集まる人の気取りの除去に役立ち」、その利用者の日常にとけ込ませる(37)。
- ⑦ 陽気な、遊び場的な雰囲気を持続している。つまり、「真面目に1分以上話そうとする人は、

ほとんど確実に失敗する運命にある。すべての話題において、どの話し手も、空中ブランコのように機知を披露し合い、練習しあっている」(37)。

- ⑧ 家を離れた時のもう一つの家である。つまり、ある人が自宅や仕事場にはいないときに、おそらくその人を見つけ出すことができる場である。「家とは根本的に違う設定だが、第三の場は、心理的な快適さや支援を与えるという点で、良い家庭と極めて似ている」(42)。

オールデンバーグは、地元の堅実な商売をしている小さな自営業の店がもっともこうした8つの特徴を満たす「第三の場」として成功しようとしている。そして、2001年には、新しい本を出版し¹⁹⁾、アメリカ各地における地元密着の小さなコーヒーショップや飲食店、書店、ガーデニングストアなど19の実例を紹介している。ただし、書店やエスニックのコミュニティセンターの図書室などは両書で紹介されているものの、公立図書館の事例は残念ながら紹介されていない。その理由は、川崎が指摘するように、「第三の場であるための条件のうち、もっとも重要な『会話を主要な活動にする』に合致しない」²⁰⁾ということと、おそらく公立図書館が、オールデンバーグの理想とするインフォーマルで小さい自営業の商店とは、かけ離れた社会的位置づけにあるからであろう。

(3)「第三の場」の機能および効用

理想的な「第三の場」は、上述のような特徴をもつからこそ、そのメンバーやコミュニティに様々な効用や利益をもたらすことができる。次に、「第三の場」を持つことの個人的利益について、オールデンバーグが論じていることを以下にまとめてみる。

□「第三の場」を持つことによる個人的利益

- ・ 社交性、会話技術の向上が図られる
様々な人々との交流を通して、社交性が育成される
- ・ 人々との交流を通して「楽しみ」が提供される
テレビやネットでなく、生身の人々の存在・会話が生み出す温かくおもしろく有益な楽しい時間を得られる／身体的、実体的なコミュニケーションが得られる
- ・ 精神的な支えが得られる
居心地の良さ、ストレスの解消、心の慰めが得られる／帰属意識をもたらす
- ・ 目新しいことが刺激と好奇心をうむ
様々な人との接触、様々なトピックの会話によって、退屈な日常を忘れ、より大きな世界を知ることができる
- ・ 人間性についての肯定的見方をもてる
他人との調和のとれた良い現実の関係性が持てるから、他人を信じることができる。
テレビ、ニュースなどのマスメディア情報と孤独の中から生まれる人間不信と猜疑心が払拭される。
- ・ 精神的強壮剤を提供する

「第三の場」のもつムードが人生のよろこび、精神的健康をもたらす。また、多種多様な人々に認められ、居場所をもつことは何よりも大きな自信と活力につながる。

「第三の場」のムード：よろこび、快活、くつろぎ、快適、中立性、ユーモア、笑い、いやし、愛情 楽しい、きらめきの時間の分かちあい
表現の自由、職場や家庭からの開放、人との楽しい交流、

- ・友情をもたらしたり、育んだりする → (「社会関係資本」の形成)
第三の場は帰属意識とともに、友人もセットであたえてくれる。個人的にみつける友人関係よりもずっと多種多様な人々と出会え、その場に行けばいつでもすぐ気楽に互いに楽しみのためだけに会える。また、職場の仲間と第三の場で友情を育むこともある。友情は場と関係なく生まれるが、友情を育む場は必要なのである。
- ・仲間同士の情報交換、助け合いが得られる／共同体の生活の知恵を学べる
社会的ネットワークによる相互援助が得られる → (「社会関係資本」の形成)
- ・知的フォーラム（人生や哲学、政治などを自由に討議できる場）に参加できる
民主主義への主体的な参加
- ・個人的なオフィスとして活用できる

オールデンバーグは、こうした個人的利益、生きている楽しみと喜びと意義は歩道を散歩するだけで簡単に得られるべきである、それゆえ街角にはいつでも気軽にアクセスできる「第三の場」が必要であると説いている。さらに、「第三の場」は住民に個人的な利益を提供するだけでなく、地域社会にも大きな利益をもたらすと述べる。次に、オールデンバーグが説く「第三の場」の社会的効用・機能について、以下にまとめてみる。

□「第三の場」の社会的効用・機能

- ・民主主義を守る政治的役割を担う
草の根民主主義には職場や家庭以外の様々な人々が集まり話し合う集会の場（フォーラム）が不可欠。
歴史的に全体主義国家、独裁国家は集会の自由を禁じてきたのであり、集会自由権は最も生得的な基本的人権である。
情報ドーナッツによる弊害やマスメディアによるコントロール、政府や企業によるコントロールに対して民主主義を守る機能を果たす。
- ・人々が集う習慣を維持・育成する → (「社会関係資本」の形成)
第三の場は近隣を結びつける機能を果たし、民主的コミュニティの形成に不可欠である。
- ・人々を結びつける／色々な人々との出会いの場を提供する → (「社会関係資本」の形成)
子どもから大人まで様々な人々が一緒に楽しく過ごせる場を提供する。
コミュニティの互助精神を育成し、居場所のない若者やお年寄りへの関心、子育てへの援助、同朋への精神的・経済的支援がおこなわれるようになる。

- ・平等主義の実践の場を創出し、あらゆる個人を包括し支援する
肩書きや能力よりも性格や個性が重視される。本当にすぐれた人が正当に評価される場、中立的な場、包み込む場を提供する。
- ・善を促進し、統制する機関となる
第三の場の中の倫理・道徳は常連や店主によって守られ、促進されている。
- ・精神的安全弁を提供する
ストレス解消や心の癒しによって人やコミュニティの活気を取り戻させる
- ・公的領域を保障する
市民による無意識の監視によって安全体制と地域の秩序が守られる

以上見てきたように、「第三の場」は、様々な個人的効用および社会的機能・役割を持つ²¹⁾が、その中でも特に人と人との出会いの場を作り出し、人と人とのつながりを育て、互酬性と信頼性にもとづいた「社会関係資本」の形成に貢献するという重要な働きがある。これが、図書館情報学研究において、「第三の場」が注目されていることの大きな理由である。そして、もし図書館が「第三の場」として機能できれば、「社会関係資本」および伝統的コミュニティ構築の他に、上述の様々な個人的、社会的効用がもたされることになり、その意義はたいへん大きいと考えられるのである。

4. 「第三の場としての図書館」についての主な研究

公立図書館と学校図書館の分野から主要な研究論文をいくつかピックアップしてレビューすることとしたい。

(1) 公立図書館の主な研究文献

①分館についての研究

アメリカの政治学者ロバート・パットナムはルイス・フェルドシュタインとの共著で、2003年に『一緒にによりよく：米国コミュニティの復元』²²⁾を著し、「社会関係資本」の創出・育成に成功している12の多様なケースを紹介し、コミュニティ復元の可能性を例証してみせた。その事例の1つとして、シカゴの公立図書館分館を取り上げている。

ところで、パットナムは、その3年前に、現在著名となっている『孤独なボーリング：米国コミュニティの崩壊と再生』²³⁾(2000)を出版し、客観的な様々な統計データや多くの具体的な事例をもとに、1970年代からの米国の地域社会における「社会関係資本」の減退を指摘した。パットナムによると、「社会関係資本」とは、「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」を指し示す。そもそもこの概念を最初に議論したと言われているのは、農村学校の指導主事であったL.J.ハニファン²⁴⁾であった。彼は、学校にコミュニティが関与することの重要性を説くにあたって、「社会関係資本」という言葉を使ったのである。そして、パットナムは、学校や近隣関係のみならず、経済、民主主義、さらには人々の健康や幸福までもが、「コミュニティの結束が弱まっている状況ではうまく機能しない」、つまり「社会関係資本の十分な蓄積に依存している」ことを指摘し、社会関係資本

の育成が現代アメリカ社会の緊急の課題であることを説いたのである。また、本書の中で、アメリカ社会における「第三の場」の衰退にも言及している。

さて、上掲『一緒にによりよく』の第2章では、シカゴの公立図書館分館群が扱われているが、特にニアノース分館についての事例に着目したい。それは、「外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含する」ような「橋渡し型」社会関係資本の育成と、「内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化」していく「結束型」社会関係資本の育成の両方に成功した貴重な事例である。ニアノース分館は、貧富の格差のある2つのコミュニティの境界に新しく建設された。その地理的条件が有効に働き、図書館で行われる様々なコミュニティ活動、ボランティア活動、学習・情報活動、そして平等で適切で幅広い図書館サービスと快適な場を通して、隔絶された両コミュニティの住民同士の出会いと交流、そして互酬性と信頼性に基づく社会的ネットワークを生みだした。パットナムは、その考察の中で「第三の場」の概念を紹介し、「オールデンバーグはその第三の場の目録に含めなかったのであるが、図書館分館は第三の場の特徴の多くを満たしている」、たしかに、図書館分館は「コーヒーショップのような純粋な社交の場所ではないかもしれない」が、「他の第三の場のように」、「コミュニティのための出会いの場」となっており、「コミュニティを映し出している」と述べた。本書において、パットナムは、公立図書館が、「社会関係資本」の育成の場、そしてコミュニティの「第三の場」となる可能性を明確に例証してみせたのである。

また、ケビン・ハリス²⁶⁾は、これからの公立図書館が、公共性(publicness)のある有効な「第三の場」として機能すべきであると説き、その役割として、地域コミュニティの結束の促進と社会関係資本の創出をあげ、「地域としての図書館」(libraries as local places)の重要性について論じている。地元コミュニティに密着した図書館がそのコミュニティ住民の「第三の場」として機能し、社会的な貢献をしていること、もしくは機能し貢献すべきであるということは、このデジタルネットワーク社会における図書館の存在意義に関わる重要な検討事項であると考えられる。

②中央図書館についての研究

1990年代から、大規模な公立中央図書館の建設がアメリカ北部で相次ぎ²⁶⁾、研究者のみならず一般の多くの人々の注目を集めた。グロリア・レッキーら²⁷⁾は、現況における公費の減少、情報技術の進展、情報化社会、分権経済、公共施設の民営化などの図書館への逆風を考慮すると、公立中央図書館の果たすべき役割と機能を検討することが喫緊の課題であるとして、1999年、トロントとバンクーバーの中央図書館において大規模な調査を行った。そして、アンケート調査、インタビュー調査、参与観察などのデータ結果から、両図書館が高度デジタル情報知識社会において市民の情報要求を満たし、重要な情報資源として高く認識・評価されていることと、両図書館が公共の場として成功していると認められていることを示した。中央図書館は市民生活において分館とは異なる役割をもつと考えられていたが、利用者は、中央図書館において高い情報要求が満たされると同時に、コミュニティの一員であるという帰属感も得ていたのである。また、両図書館は、オールデンバーグの「第三の場」の規範も満たしていると述べ

られている。しかし、その根拠となるデータや記述が不足している上、「第三の場」を解説するにあたり、「会話」を「情報交換」と言い換えたりしており、いくぶん都合よく解釈しているように思える。

このレッキーらの研究を踏まえ、カレン・フィッシャー²⁸⁾は、2004年にシアトル公立図書館中央館についてインタビュー調査をおこない、「第三の場」とティム・クレスウェルの「場」を枠組みにデータ結果を検証した。フィッシャーらは、オールデンバーグの言に忠実に則して、「第三の場」の8つの特徴を紹介し、厳密に調査結果と照合した。その結果、8つの特徴（3節（2）、4ページ参照）の内、①②⑧については完全に適用できたが、③④⑤⑥⑦については全くもしくは部分的にしか適用されなかったと述べている。すなわち、会話は同館の中心的活動ではない、建物の規模が大きいため知り合いはほぼみつからない、まじめな雰囲気が支配している、目立つ建物であるなどが、「第三の場」の特徴に当てはまらないと説明している。ただし、この調査では、図書館のプログラム室での活動についての考察が入っていない。パメラ・マッケンジー²⁹⁾は、カナダ公立図書館分館のプログラム室での女性の編み物グループ、および乳幼児のためのお話をを観察に基づいて考察し、参加者らが公共スペースを私的空間に変えて利用していることを明らかにしている。そして、その私的空間は、「第三の場」にほぼ該当すると述べている。マッケンジーらは、こう述べている³⁰⁾。

公立図書館を1つの種類のスペースとは把握できない。むしろ多様な関係を支援し、多様な領域を用意する場所と理解すべきである。・・・ギヴンとレッキー³¹⁾は、「静かなスペースとしての図書館」と対比して「相互作用としての図書館」を認めることが重要であると考えた。それをさらに発展させて、図書館利用者の間、利用者と職員との間、利用者と図書館スペースとの間の関係に注目することで、図書館利用と情報実践とをまったく新しい方法で再概念化できると提案したい。

公立図書館には、学習室、閲覧室、児童室、情報検索コーナー、プログラム室、ホール、レファレンスコーナー、カウンター、書架スペースなど多様なスペースがあり、多様な人々のニーズへの対応が行われている。そして、各スペースを利用する人々の間に、その物理的な場が接触や交流をもたらし、社会的なつながりが創出され、育まれていると思われる。学習や研究活動が主体とされる中央図書館においても、プログラム室や多目的スペースなどにおいては多様な活動が行われており、社会的、私的空間として「第三の場」が生み出されている可能性は高く、これからのさらなる研究が期待される。

（2）学校図書館についての主な研究

アドリアナ・エスティル³²⁾は、アメリカの高校生たちが主人公のテレビドラマを取り上げて、高校の学校図書館がどのように主人公の生徒たちに多様に利用されているかを分析している。主人公は友人たちとその学校図書館をほぼ専有し、司書や友達とともに、貴重な古書やインターネットを駆使して様々な問題を解決していくというストーリーである。本論の最も重要と思わ

れる分析結果は、「図書館という場が利用する登場人物によって活かされ、社会的に生産されるときともに、登場人物の実践に支配的な影響を与えている点にある」³³⁾。ガラ空きだった図書館は、主人公らに利用されることによって、あらたな場＝「第三の場」として生まれ変わったのである。つまり、学校図書館は、「第三の場」を創出し、「結束型」の社会的資本を育成する力を有しているのである。さらに、著者は考察を進めて、社会関係資本および「第三の場」における結束性、包括性のよい面ばかりでなく、裏面の私物化、排除、統制などの2項対立の関係についても論じている。しかし、ドラマの中で、もう一つ実質的に生徒の「第三の場」となっていたクラブが、「橋渡し型」社会関係資本として、学校図書館と様々な面白い対比を見せていたことの指摘があまりなかったことは残念である。また、対象が実際の学校図書館ではなく、テレビの中のイメージ的な学校図書館であるため、純粋な実証的研究ではない。

ポーラ・ブレンヘーガー³⁴⁾は、アメリカのオハイオ州にあるコールレイン高校の学校図書館が多様な生徒が集い、笑いと温かさに満ちた「第三の場」となっていることを報告している。10代の生徒たちは友人たちとの社交の場や大人との接触を強く求めているが、そうした物理的な場が現代社会では減少しているために、安全で質の高い「第三の場」を学校図書館や公共図書館が提供することは、デジタル社会に生きる生徒の健全な心身の発育や社会性の発達にとって非常に重要であり、また地域コミュニティの健全性にとっても必要であると論じている。ただし、これは短い報告であり、フィールドワークやインタビューなどの調査に基づいた研究ではない。

5. 最後に

オールデンバーグの「第三の場」の概念、および公立図書館と学校図書館について「第三の場」を用いて考察した主要な論文をいくつか紹介した。その他にも大学図書館に関して「第三の場」から検討した実証的な研究もある。例えば、リサ・ワックスマンら³⁵⁾は、アンケートとフィールドワークによって、大学生たちの好む「第三の場」について調査した。その結果、大学生は大学の外にあるコーヒESHOPやレストランを「第三の場」として好み、そこでの社交と心身の回復・リラックスを求めていることがわかった。その調査結果をもとに大学図書館のコーヒESHOPを、多くの学生たちを引きつけるような居心地良く魅力的な「第三の場」にする具体的なプランを提案している。また、歴史的研究としては、アダム・アレンソン³⁶⁾が、19世紀ソーシャルライブラリが、田舎から都会に出てきて働く孤独な若者たちの「第三の場」としても機能を果たそうとしていたことを明らかにしている。カレン・ローソン³⁷⁾は、20世紀において公立図書館や大学図書館、学校図書館などが、それぞれのコミュニティの「第三の場」であったと論じている。ローソンによると、図書館は、そのコミュニティの成員に差別無く情報へのアクセス、サービス、安全な環境とともに、人間的接触と社会的経験とを提供していたのである。そして、その伝統的な経験を生かして、これからの図書館がバーチャルな「第三の場」を提供するようなより良いオンライン・サービスを構築することを提案している。また、「第三の場」という言葉は使っていないが、図書館を「出会いの場」「社会関係資本形成の場」として分析した研究など³⁸⁾もある。

今年度（2009年度）のIFLA（国際図書館連盟）では、本会議に先立ち、サテライト会議「場とスペースとしての図書館」³⁹⁾が開かれた。そこでは、「第三の場」をテーマとして様々な報告がなされ、図書館をいかに魅力的な「第三の場」にするかについて世界各国からの参加者が討議をおこなった。「第三の場」はもともとアメリカ都市研究の中から生まれた概念であるが、今や世界中の図書館情報学研究者が、図書館の場とスペースについて考察する際の重要な概念的枠組みの一つとして関心を寄せている。

現在、デジタル高度情報化社会の進展、地域コミュニティの衰退の中で、人々が集まり、互いの顔を見合って情報交換し、交流しあえる場が必要とされている。公立図書館は、利用者の多様な学習・情報要求にこたえ、文化・情報を保存し現在・未来に伝える場であることが基本的な存在意義であるが、ハニファンが指摘した学校のように、図書館も社会関係資本の蓄積があってこそ、その本来の機能と役割を十分に発揮できると考えられる。図書館が、利用者やコミュニティの「第三の場」となること、もしくはそのスペースや機能があるということは、社会関係資本の育成につながる。それは、利用者の日常生活の豊かな営みやコミュニティの紐帯を支えることになるとともに、図書館の基本的な存在意義を支えることにもなるのであり、非常に重要な検討課題であると筆者は考えるのである。

注

- 1) Wiegand, Wayne A. (2003) "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," *The Library Quarterly*, 73(4) p.369-382
- 2) 吉田右子・川崎良孝 (2009) 「アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究」『図書館界』61(1), p.12
- 3) 根本彰 (2005) 「『場所としての図書館』をめぐる議論」、『カレントアウェアネス』286, p.21-25.
- 4) Birdsall, William (1996) 『電子図書館の神話』 根本彰ほか訳、東京、勁草書房.
- 5) "Library as Place: Rethinking Roles, Rethinking Space," Council on Library and Information Resources(図書館情報資源振興財団:CLIR), 2005, vii, p.81(online), available from <<http://www.clir.org/pubs/abstract/pub129abst.html>>, (accessed 2009-12-01)
- 6) Bushman, John E. and Gloria J. Leckie, eds. (2006) *The Library as Place: History, Community and Culture*, Westport, Connecticut, Libraries Unlimited. [『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』川崎良孝・久野和子・村上加代子訳、京都大学図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売、2008]
- 7) Van Slyck, Abigail (2006) "Managing Pleasure: Library Architecture and the Erotics of Reading," *ibid.*, p.221-234 [『楽しみの管理：図書館建築と読書のエロティクス』、*ibid.*, p.325-343]
- 8) Antell, Karen, and Debra Engel (2006) "Stimulating Space, Serendipitous Space," *ibid.* [『刺激的なスペース、偶然のスペース』『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』*ibid.*, p.241-260]
- 9) Leckie, Gloria J., and John E. Bushman (2006) "Space, Place, and Libraries: An Introduction," *ibid.* [『スペース、場、図書館：序』『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』*ibid.* p.34]
- 10) 関連する論文については以下にて順次紹介していく。なお、こうした概念に対して新たな角度から検討をせまる批判的図書館研究も掲載されている。Rothbauer, Paulette (2006) "Locating the Library as Place among Lesbian, Gay, Bisexual and Queer Patrons," *ibid.* [『場としての図書館をレズビアン、ゲイ、両性愛者、クウィアーの利用者の中に位置づける』『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』*ibid.* p.149-172]

- 11) Oldenburg, Ray(1999) *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and other Hangouts at the Heart of a Community*, New York, Marlowe & Company.
- 12) Jacobs, Jane(1961) *The Death and Life of Great American Cities*, Random House Inc., 『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳、鹿島出版会、1969
- 13) Grats, Roberta Brandes(1994) *The Living City: How America's Cities Are Being Revitalized by Thinking Small in a Big Way*, John Wiley & Sons.
- 14) Gruen, Victor(1967) *The Heart of Our Cities*, New York, Simon & Schuster.
- 15) Putnam, Robert D.(2000) *Bowling Alone: Collapse and Revival of American Community*. New York, Simon & Schuster [『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳、柏書房、2006、p.15]
- 16) Jacobs, Jane(1961) *op.cit.*12)
- 17) Oldenburg, Ray(1999) *op.cit.*11)
- 18) Fisher, Karen E., Matthew L. Saxton, Phillip M. Edwards and Jens-Erik Mai(2006) "Seattle Public Library as Place: Reconceptualizing Space, Community, and Information at the Central Library," *The Library as Place*, *op.cit.*6) [「場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化』『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』*op.cit.*6)p.199-237]
- 19) Oldenburg, Ray, eds.(2001) *Celebrating the Third Place: Inspiring Stories About the "Great Good Places" at the Heart of Our Communities*, New York, Marlowe.
- 20) 吉田右子・川崎良孝 (2009) *op.cit.*2), p.12
- 21) 補足すると、オールデンバーグは、「第三の場」をよく描きすぎだという批判に対して、考察は綿密な観察にもとづくものであると答えている。ただし、現代アメリカにおける社会的・個人的病理への普遍的な治療法ではなく、あくまで「第三の場」は個人的な選択であると述べている。また、「第三の場」は、「結束型」社会関係資本同様に内向きで排他的な負の面を持つこともある。しかし、外向きの質の高い「第三の場」が形成されるならば、個人や社会をより豊かに、より健全に、より楽しく、より強靱にすることは間違いない。
- 22) Putnam, Robert D., and Lewis M. Feldstein(2003) *Better Together: Restoring the American Community*, Simon & Schuster.
- 23) Putnam, Robert D.(2000) *op.cit.*15)
- 24) Hanifan, Lyda Judson(1916) "The Rural School Community Center," *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 67, p.130-138.
- 25) Harris, Kevin(2003) "Your third place or mine ? Public libraries and local communities," *Public library Journal*, 18(2), p.26-29
- 26) サンフランシスコ、シカゴ、フェニックス、バンクーバー、など
- 27) Leckie, Gloria J., and Jeffrey Hopkins(2002) "The Public Place of Central Libraries: Findings from Toronto and Vancouver," *Library Quarterly*, 72(3), p.326-372
- 28) Fisher, Karen E., et al(2006) *op.cit.*18)
- 29) McKenzie, Pamela J. et al.(2006) "Behind the Program-Room Door: The Creation of Parochial and Private Women's Realms in a Canadian Public Library," *The Library as Place*, *op.cit.*6)[「プログラム室の扉の内側：カナダ公立図書館における狭く私的な女性領域の創造』『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』*op.cit.*6), p.193-194]
- 30) *ibid.*
- 31) Given, Lisa M., and Gloria J. Leckie(2003) "Sweeping the Library: Mapping the Social Activity Space of the Public Library." *Library & Information Science Research*, 25(4), p.365-385
- 32) Estill, Adriana(2006) "Going to Hell: Placing the Library in *Buffy the Vampire Slayer*," *The Library as Place*, *op.cit.*6) [「地獄に行く：『ヴァンパイア・スレイヤー：聖少女バフィー』に

- おける図書館の位置づけ」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』op.cit.6),p.345-370]
- 33)Leckie, Gloria J., and John E. Bushman(2006) "Space, Place, and Libraries: An Introduction," *The Library as Place*, op.cit.6) [「スペース、場、図書館：序」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』op.cit.6) p.34]
- 34)Brehm-Heeger, Paula(2006) "A Tie for Third Place; Teens need physical spaces as well as virtual places," *School Library Journal*, 7/1/2006, p.27.
- 35)Waxman, Lisa et al.(2007) "The library as place: Providing students with opportunities for socialization, relaxation, and restoration," *New Library World*, 108(9-10),p.424-434.
- 36)Arenson, Adam(2006) "Libraries in Public before the Age of Public Libraries," *The Library as Place*, op.cit.6) [「公立図書館の時代に先立つ公共の図書館：アセニウムをはじめとする「ソーシャル・ライブラリー」の備品とデザインの解釈：1800-1860年」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』op.cit.6),p.59-89.]
- 37)Lawson, Karen(2004) "Libraries in the USA as traditional and virtual 'third place'," *New Library World*, 105(1198/1199), p.125-130.
- 38)いくつか掲げると
- Audunson, Ragner(2005)"The public library as a meeting-place in a multicultural and digital context? The necessity of low-intensive meeting-places," *Journal of Documentation*, 61(3), p.429-441.
 - Audunson, Ragner et al.(2007) "Public libraries, social capital, and low intensive meeting place," *Information Research-An International Electronic Journal*, 12(4).
 - Rafste, Elisabeth Tallaksen(2005) "A Place to Learn or a Place for Leisure? Student's Use of the School Library in Norway," *School Libraries Worldwide*, 11(1), p.1-16
 - Varheim, Andrea et al.(2008) "Do libraries matter? Public libraries and the creation of social capital," *Journal of Documentation*, 64(6), p.877-892.
 - Varheim, Andrea(2007) "Social capital and public libraries: The need for research," *Library & Information Science Research*, 29(3), p.416-428.
- 39)Ojala, Marydee(2009) "Libraries as Place and Space: An IFLA Satellite Conference," *Information Today*, 26(9), p.34-35.